

学術的調査の密命を帯びて来日

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト (1796-1866) はドイツ・ヴュルツブルクで医学を修めた後、出島のオランダ商館付医師として 1823 年に来日。オランダ政府より日本の学術的調査を命じられ、約 6 年間にわたる長期間日本に滞在しました。医学の腕を買われたシーボルトは特別に出島の外での診察を許され、1824 年には長崎郊外に鳴滝塾を開設しました。鳴滝塾は診療所と私塾を兼ね、日本全国から集まった多くの医師に最新の西洋医学を伝授しました。

シーボルトは門人たちの協力を得て動植物採集の手を広げ、門人たちに課題を与えてオランダ語の論文を提出させることで、日本に関わる知識を幅広く集めました。また、欧州への輸送に備えて生きた植物を出島内の植物園や鳴滝塾に収集しました。1826 年の江戸参府に随行して 11 代将軍家斉に謁見し、その途上で多くの医師や本草学者と親しく交わりました。

1828 年に国禁である日本地図などを国外へ持ち出そうとしたとの嫌疑がかけられ出島から出ることができなくなり、1829 年に国外追放・再渡航禁止の処分を受け、1830 年 1 月に日本を離れた。帰国後は、日本から持ち帰った膨大な資料を整理して「日本植物誌」「日本動物誌」「日本」を含む多数の著作を執筆し、オランダ・ライデンの自宅で収集品を一般公開しました。1858 年の日蘭修好通商条約の締結により追放解除となり、翌年の 1859 年から 1862 年にかけて再来日を果たしています。



上図：シーボルト著「日本」(1832 年)より楠本滝の図
(Wikimedia public domain)



上図：川原慶賀画「シーボルトの肖像」
(Wikimedia public domain)

シーボルトは、来日後まもなく知り合った楠本滝 (1807-69) との間に娘イネ (1827-1903) を 1827 年にもうけています。シーボルトは手まり咲きのアジサイを *Hydrangea otaksa* として「日本植物誌」に採録し図を掲載していますが、その種小名は妻の名前「おたきさん」に由来すると推測されています。



上図：アジサイの図 (シーボルト・ツツカリーニ共著「日本植物誌」より) (京都大学附属図書館所蔵)

ベルギー到着後の受難

シーボルトを乗せた船は 1830 年 7 月に現ベルギーのアントワープに到着。積載した 485 種の植物のうち約 260 種が生き残っていました。シーボルトはそれらの植物をヘントの植物園に運び、植物の世話を監督するため約 2 ヶ月ほど滞りましたが、1830 年 8 月にはじまったベルギー独立戦争の余波を受けてオランダのライデンに避難しました。

戦争中、ヘントの植物園に残された日本の植物は、現地の園芸商によって持ち出されて増殖・販売され、大部分が散逸してしまいました。シーボルトは 1839 年の戦争終了後に返還を求め、その結果 80 種を取り戻すことができました。

「日本植物誌」の刊行

シーボルトが日本から持ち帰った植物の標本は、押し葉標本の他に蒸留酒漬けの果実や木材のサンプルなどを含み、約 2,000 種、12,000 点を数えます。これらをもとにした日本植物誌の刊行に向け、シーボルトはドイツの植物学者ヨーゼフ・ゲアハルト・ツツカリーニ (1797-1848) の協力を得ました。「日本植物誌」(Flora Japonica) の刊行はシーボルトとツツカリーニの共著で 1835 年にはじまり、1844 年に第 2 巻の前半まで刊行したところで中断。シーボルトとツツカリーニの死後、オランダの植物学者フリードリッヒ・アントン・ヴィルヘルム・ミケル (1811-1871) によって遺稿が整理され、1870 年に第 2 巻の後半が刊行されました。

日本の植物を通信販売

1842 年、日本と中国の植物を輸入し、園芸を奨励することを目的とした「オランダ王立園芸奨励協会」が設立され、初代会長にシーボルトと王立植物標本館の館長を務めたカール・ルートヴィヒ・ブルーメ (1796-1862) の 2 人が就任しています。オランダ政府の資金援助でプラントハンターが派遣され、収集した植物はオランダ東インド会社の割引運賃で輸送できるようになりました。

同年にシーボルトは、日本などから送られてくる植物をオランダの気候に適応させることを目的とした馴化植物園をライデンに創設しました。馴化植物園では増殖した苗の通信販売を行い、大いに繁盛しました。通信販売はシーボルトの死後も継続され、ユリ、アジサイ、ツバキ、ツツジ、タケなどの日本の植物がここから西欧諸国へ普及していきました。



上図：ライデン大学植物園内にあるシーボルト記念庭園の外観
(Wikimedia public domain)

日本の植物導入のパイオニア

シーボルトは、オランダ王立園芸奨励協会の年報に「1824 年から 1844 年までの日本からの植物の輸入についての歴史的説明」と題した論文を寄稿しています。そのなかで、日本の植物が西欧諸国で盛んに栽培されるようになった現状とともに、日本の植物が愛される理由を次のように伝えています。「新しいもの、珍しいものへの憧れだけでそうなのではなく、ヨーロッパの庭園や野外はもちろんのこと、冷温室でも栽培しやすく、しかもよく繁殖し、花も美しく頻繁に咲き、その香りもすばらしいことによるものである。(中略) 日本という島国の植物相は、その多様性と美しさにおいて、世界の他の国々に例を見ないほどである。」(石山禎一著「シーボルト日本の植物に賭けた生涯」里文選書、2000 年より引用)

シーボルトは、日本の植物を西欧の園芸に導入したいと考え、植物を生きたまま輸送することにこだわり、下表のように成功率が低いなかで、あきらめることなく輸送を続けました。

発送年	発送種数	生き残った種数	成功率 (%)
1829	約 500	約 40	8.0
1830	485	80	16.5
1841	86	17	19.8

1843 年 11 月初旬に日本から発送した数百種類の植物には、当時最新の技術であったウォードの箱が使われましたが、手違いからジャワ島の倉庫内に長期間留め置かれた後、1 年以上を要して 1844 年 11 月下旬に到着。生き残っていたのはごくわずかでした。この結果を受けて、シーボルトはウォードの箱を植物の長期輸送には不向きと酷評しました。



上図：カノコユリの図 (シーボルト・ツツカリーニ共著「日本植物誌」より) (京都大学附属図書館所蔵)